

ゲーテと大乘仏教

大沼栄穂

序

ゲーテは決していわゆる体系的哲学者の部類に属さないであろう。しかし彼はおそらくどの哲学者にも劣らず、人間らしく生きるとはどのようなことを追求し、それに応えるべきものとしての哲学を要求したといえるのであるまいか。たとえば彼の晩年の人生智の結晶とされる千数百篇に及ぶアフォリズムには、人間らしく生きるとは人間存在の真相に忠実になること、いいかえれば真に自由になるうとすること、哲学はそれを助長するべきものであること等の注目すべき主張が随処に読みとれるのである。このような主張は、実はゲーテに限らず、真理探求ということの本来の意味を回復しようとする広義の人間哲学に共通にみられるものであり、たとえばゲーテが全く知らなかったはずの大乗仏教もそ

の例外ではないと思われるのである。「ゲーテは思想体系の本質からすれば大乘仏教の行者であった」という指摘はそのような意味において、非常に興味深いのである。

さて、本論考は、ゲーテのことを通して、いわば典型的人間の生き方としての大乗の行者の条件を描こうとする試みである。あるいはまたはゲーテの根本思想と大乘仏教の核心の問題についてのある観点からする比較研究の些少の努力である。その構成（骨子）を導びくべく今しばらく予備的考察を試みて序に代えたい。

ゲーテの根本思想と思われるものに、人間らしく生きるとは人生に内在するもろもろの要求に忠実になることであり、それらより高いものに転化するために努力することであるという重要な主張がある。このことは他の表現をかりれば、人生の目的とする

幸福は必ずしも等質でなく、さまざまの挫折を節目とするいくつかの段階を有するということであり、さらにそのことはその最高のものが一種の人格活動であるということをも意味するのである。後述するように、この人格活動とは人間の自由にもとづくところの真理探求の姿勢に他ならないのであるが、多くの場合われわれはそのことを理解し得ず、むしろそれから逃避しているのである。

さて、ゲーテによれば、哲学というものはこの真理探求という人間らしい生き方を自覚させ、徹底させることにその使命があるのに、一般にはそれを放棄しているのである。真理探求とは一方において永遠をのぞみながら、他方同時にそれにもかかわらず（むしろそのゆえに）無常を覚悟し、対決するといういわば人間存在の実相そのものであり、そしてまた哲学とはこの実相を完成させる努力、無常と対決しそれを無常でなくする *inver-gänglich machen* 努力であるはずなのであるが、にもかかわらず哲学はその本末を転倒して、無常の空しさのみを強調し、空虚な思弁をもてあそんでいるのである。⁽³⁾

ゲーテがその中であってソクラテスを尊敬したのは、彼がソフィストやあるいは多くの哲学者とは異なり、単に人間存在の無常の空しさ（無知）を検察したにとどまることなく、むしろそのことの積極的意義を強調することに力点を置いたからである。すなわち真に人間をよりよくするものとしての哲学、愛知活動としての哲学を説きみずから実践したからである。真の哲学というものは

が健全な人生の生き方であることを教えたからである。

人間らしい生き方あるいは哲学のあり方に関する以上のようなゲーテの態度をかえりみると、われわれはそこに大乘仏教の成立事情を要約するもの、従って多少過大な表現ながら大乘仏教の核心の理解と実践がいかなるものであるかを暗示するものを見出し得ないであろうか。

すなわち、次のようなことである。

真理探求は人間存在の実相そのものであり、それは彼の自由にもとづく。

そのことの正しい実践（真理探求生活完成の努力）のみが健全な人生態度を約束する。

われわれは右二点をさらにそれぞれ二分、三分して次のような本論の構成を導き、以下に両者の比較検討を試みてみたい。

- 一 求める存在としての人間
- 二 求めることの意味としての自由
- 三 人生の目的としての幸福
- 四 右に至る方法としての教育
- 五 理想の社会（人間社会の平和）

一

「人生はいかに平俗に見えても常にあるより高い要求を秘かに抱き養いつづけており、これを満足させる手段を探している」と⁽⁵⁾

いうゲーテのことは、求める存在としての人間の真相を雄弁に語っているものである。人間らしくあらうとすることは何よりもまずこのような真相——われわれはそれを真理探求と呼んでみたのであるが——に忠実にならうとすることであろう。では、この求めること、あるいは真理探求とはどのようなことなのか、本節において考えてみることにしたい。

さきのゲーテのことは、人間の要求というものが実は求めるかぎり充たされないということ、従って個々の要求はつねにより高い要求のために挫折する宿命にあるということをも意味するのである。人間は努力するかぎり迷う *Es irritiert Mensch, solange er strebt* (「ファウスト」) ということは、求める存在としての人間が自己矛盾的逆説的存在であることを示すのである。われわれは正直であろうとしかぎり公正たり得ず、誤りは絶えず行為において繰返され、善いもの正しいものを完成させるための純粋な中庸を得た活動はきわめて稀であり、われわれは内心の反論をのがれることができないのである。自信にみちた人生の歩みの中で突然自分が錯誤にとらわれていたことの自覚はたれしも経験することであろう。

この種の自己矛盾の事実が、きわめて人間的でありしかも人生不可避の嚴肅な事実であるということは、日常何気なく繰返されていく「何をなすべきか」の問いかけが時として非常な重みをもつことでも容易に推察できるであろう。われわれは真剣であろう

とすれば毎日のように、いな時々刻々「何をなすべきか」「なすべく何を知っているか」を自問自答せざるを得ないが、よく考えればこのことはなすべきことがありそれを知りたいという永遠志向と、それにもかかわらずそれを知り得ないという無常志向の二律背反的自己矛盾そのものを表わしているのである。

「何をなすべきか」に象徴される自己矛盾が緊張ないし悲観として受けとめられるのは、それがしばしば単に個人の問題にとどまらず、良法変じて悪法となり美俗変じて陋習となるような社会の一種の価値混乱の意識につながるからである。崇高なものは知識によってバラバラにされ、いかなることばも静止しないのであり、どんな偉大な理念も現実化されるや否や暴君のように作用するからである。そのようなときわれわれはどんな権威も真理と同様に誤りを伴うこと、どんな秩序からも最後に杓子定規が生れて来ることを認めざるを得ないのである。あらゆる時代・あらゆる国民に妥当し得るまことの判断はきわめてまれであることをいや応なしに知るのである。

人間的であろうとすること、自己の存在真相に忠実であろうとすることは、かくて必然的に価値混乱の意識のただ中に身を置くことである。真理探求とはその失敗反応を認めることに他ならぬ。われわれはそれをしばしば『無常』ということばで示す。

『無常』ということばはだいたいにおいて否定的にうけとめられている。われわれは一般にこの無常を人生における苦しみの根

源としてその深い積極的意味を考えずにいる。そのあげく、われわれは真理探求というわれわれの実相から自己を疎外し、逃避的
人生態度に追いやっている。

大乘仏教というものがその出発点としてかかげる「生死」ないし「無常」という人間生存の現実、とりあえずは以上述べたような求める存在としての人間の否定的側面を暗示しているように思われる。そこにおいてこの「生死」とか「無常」は実は、われわれが求めることの意味——真の自己——に對する、無知に他ならないとされるからである。⁽¹⁷⁾しかしながらそのことはいいかえれば「生死」とか「無常」はもしその真の意味が了解されるに至れば、逆にもはや否定的側面としての「生死」「無常」ではなくなるのだという樂觀をも底流させているのである。われわれは次章において大乘の核心を形づくる第二の柱としてそのことを見たいと思う。

二

ゲーテはインドの思想については一般に積極的理解を示さなかったといわれる。それは当時のインド研究のレベルの低さとか、現世否定的な側面のみが強調されているという事情も手伝ったものであろう。それゆえ、もし彼が大乘仏教の存在について知ったなら、状況は一変したであろうことが推察されるのである。なぜなら、大乘仏教とは、まさにゲーテの歓迎する「無常を無常でな

くする努力」としての典型的人間回復の哲学のように思われるからである。

さて、われわれは『ファウスト』の中にすべて無常なるものは比喩に他ならず *Alles Vergänglichhe, Ist nur ein Vergleichnis* ということばを周知しているが、このことばの中にこそ、無常を克服するものとしての彼の哲学の鍵を見出すことができるものではないか。無常とは無常ならざるものの存在する証拠である。それは、真理を求めるが得られないという人間の自己矛盾の実相を肯定する深い積極的理由をも明らかにするのである。真理とは存在するからこそ、かんとんに知り得ない。人間は正直であろうとするから不偏不党であることを約束できない。人間は努力するからこそ迷う自己を自覚する。本来人間を愛すべき存在たらしめているのは彼の迷誤である。⁽¹⁸⁾誤りをぞんざいにすることは同時に真理をきずつける等のゲーテのことばにはゲーテ自身その存在について知らなかったはずの大乘の英知が脈動しているといえないであろうか。真理とは所有すべきものでなくて探求すべきもの、認識の失敗反応のつきかさねこそ成功反応、完全さとは努力の中にあるという菩薩の知恵が見られないであろうか。たとえば先にあげたゲーテのことばも「この生死はすなわち仏のおいのちなり」「煩惱即菩提・生死即涅槃」「衆生本来仏なり」等々の語句とおどろく程の類似を思わせるのである。

大乘仏教の核心を示すことばの一つに「修よりほかに証をまつ

「思いなかれ」という有名な道元の戒句がある⁽²⁰⁾。これは、さとりと

いうものは日々の修業の中にあるもの、迷いの自覚の中に約束されて
いるもの、身近にあってしかも永遠に心がけられるものとい
うほどに理解されるのであるが、同時にそれは人間が自由である
ということの真意を日本語で示した好例であると考ええる。われわ
れはそのうらづけを、西洋的修証一等の知恵ともいうべき、『フ
アウスト』の次の語句に見出し得るからである。

Nur, der verdient sich Freiheit wie das Leben, Der
tglich sie erobern mu.

(自由とは自由であらうと努力する者のみが享受に値する)
さとりというものがそうであるように、「人間が自由である」
ということの理解は、単に頭の中で可能にするというものでない。
それは日々の生活の中に人間が刻々努力してかち得るもの、近い
ようで遠いまさに人間の最終的課題なのである。

現実に入れわれはほとんどこの自由の意味をはきちがえている。
ゲーテによれば、フランス革命後、自由が権利であることのみが
強調されむしる義務であることが忘れられている。われわれはや
やもすれば自身を統御することをなさしめないでわれわれの精神
を解放しようとする危険を犯している⁽²¹⁾。思想と言論の自由を公け
の場だがいに軽蔑しあってもいとうらうことに解している⁽²²⁾。だ
れもが自分の知ったと信ずることを伝えなければならぬと信じ
ているのである⁽²³⁾。

以上、これまでわれわれは大乗の核心として人間存在の実相の
意味、求めることの理由としての自由について考察してきた。

次にわれわれはそれらの正しい理解は必然的に大乗の実践とも
いふべき積極的的人生態度を可能ならしめるものであると考え、以
下、人生の目的としての幸福、その方法としての教育、その展開
としての平和という三つの項目において考察してみたい。

三

人間はたれしも幸福をねがう。それゆえ、人間らしくあること
の追求としての哲学は、たれしもがその気になりさえすれば幸福
になれるはずであるという力強い人生観をその第一の特色として
有するものであらう。そしてそれは人生には苦しみがつきもので
あるがそれには意味があり、その意味を正しく知ることによって
苦しみがよるこびに転ずるといふ、あの大乗の核心の理解を通し
てはじめて可能になし得るものでなかるか。それはまた同時に
健全な人生態度の樹立をめざすあらゆる人間哲学が有する共通の
特色であるように思われる。

さて、われわれはゲーテの周知の「何はともあれ、人生は善し」
Wie es auch sei, das Leben, es ist gut. (『フアウスト』) 「幸福
はいつも眼の前にある」 das Glück ist immer da (『追憶』)とい
うことばの中に右にのべた典型的な人間哲学の好例を見出し得る
と考えるのであるが、以下それをいわばゲーテ的福德知一致の思

想と仮称し、彼のアフォリズムを通してうらづけてみることにしたい。

「わたし達の欠点を矯正し、わたし達のあやまちを償ってくれるものが最高の幸運である」とか「探求し得るものを探求しつくし探求し得ないものを心静かに崇めることが思索する人間のもっともすばらしい幸福である」というゲーテのことは徳性涵養とか自己完成の努力の中に人間の幸福があるという古典的福徳知一致の思想を思わせるものである。それらを約束するものこそ真理探求の生活であるというストア的発想がそこに見られる。また彼が『西東詩篇』において、地上の子らの最高のよろこびはただ人格であること、そのことを庶民も下僕も勝利者もだれもが共通に、しかもいつも *zu jeder Zeit* 告白しているとうたわせていることも、それをうらづけているかに見える。

しかしゲーテ的福徳知一致とはより実践的、より大乘的であつて、単なる徳性涵養とか単なる自己完成とか以上のもの、すなわち他者救済をも含むところの真理探求なのである。大乘において菩薩の波羅蜜多行が単なるさとり完成にとどまらぬ衆生済度をも含んでいるように。ゲーテが努力や忍耐、さらに無抵抗を説き、さらに仕事によるこびと誇りをもつべきことを強調するのはそのあらわれであらう。

四

人間らしくあろうとする哲学が要求する力強い人生観の第二の特色は、教育すなわち幸福の創造ないし方法についてのそれである。

こんにち、教育とは何か、という古くして新しい問いがくり返されているが、それは所詮、幸福とは何かという問いの無限性にもとづくもの、ひいては人間とは何かという問いの永遠性にもとづくものといひ得るのであらう。大乘仏教に代表され、またゲーテにも見られる人間回復の哲学はいったいこの問題をどのように答えているのであらうか。

教育の本質についての正確な理解は人間存在の実相(真理探求)とその意味、大乘仏教的にいえば菩薩と空の把握にまつものであらう。またそれによる人生苦の克服ないし幸福創造の方法がすなわち教育の方法ということになるであらう。

前者についていうと、まず

真理というものが単に存在するのではなく主体的に学ばれ得るものであるということから、教育とは本質的に自己教育であり、自ら学ぶことを教えるもの、という、いわばこんにちの教育の自由化とか個性化の主張にもつながるような根拠が示されるであらう。「君たち自身の中を捜したまえ。そうすれば見出されるであらう」(28)「人はまず自分自身を教えなければならぬ……」(29)「自分の

權威を基礎づけるべく努めよ⁽³⁰⁾。また真理の探求ということは、それが当然終りがあるてはおかしいということなのであるから教育

とは、本質的に生涯教育(学習)であるということが帰結される。

「わたし達は毎日のように自己を改革せねばならぬ……」⁽³¹⁾「わたし達は毎日のように経験を解明し精神を浄化する必要を感じる」⁽³²⁾

「年をとるにつれて試験もまたきびしくなる」⁽³³⁾。

次に後者、つまり教育の方法についていうと、

真理探求とは所詮、人間存在の逆説的・弁証法的実相に忠実に
なることだということからその正しい方法理念がみちびかれると
いうことである。例えば古くは「悪をさけ」「善をなし」「その心
を淨くせよ」を意味する「戒」「慧」「定」の三学、がその典型の
ように思われる。それはおそらくインドに限らぬ全人類史的背景
を有するものでなからうか。たとえばキリスト教も所詮は「律法
を守り」「人を愛し」「神に祈れ」の三者の弁証法的有機性を強調
しているのである。こんにちのわれわれも、全人教育の項目とし
てかかげる「徳育」「知育」「体育(ないし情操教育)」の本来の意
味やその有機性を回復しようとするならば、これまで見たような
古来の人間回復の哲学に耳を藉すべきでなからうか。徳育と
は、なすべきことがある(それによって悪をさける)という人間の
永遠志向を充たし、知育というものが、それにもかかわらずむ
しろそのゆえにつねに「何をなすべきか」を問いなおす無常志向
を、体育というものが、この自己矛盾の苦しみを克服する心の強

さ、素直さをめざすものという解釈である。

「私たちの生れつきは礼儀作法によっていよいよその輝きを増
すべきものである」⁽³⁴⁾「礼儀作法の形式にはすべて深い内面的な根
拠がある。本当の教育とは形式とこの内面的な根拠を同時に伝え
るような教育の謂である」⁽³⁵⁾。ゲーテはまた心の平静こそ人間をし
て最高の教養に至らしめるものであり、宗教や芸術の教育的意義
をそこにおいているかに見えるのである。

五

大乘の人生論のしめくりとして、理想社会ないし平和に関す
るものを問うてみたい。

「自由に自分自身の幸福を鍛えることよりこの上なく美しい平
和をいったい何がわれわれに与えるのか」(『格言風』)というの
がまさに大乗行者たるゲーテの面目を躍如たらしめている。一人
ひとり各自が自己を幸福にする(鍛えるschmieden……)努力が、と
りもなおさず平和であるとは、一人ひとりが仏・菩薩であること
の自覚と実践がとりもなおさず浄土であり蓮華園であるとする大
乗の平和観と通ずるものを感じるからである。これはまた平和と
は単なる秩序以上のものであり、心の中にきずきあげるべきもの
とするユネスコ宣言の趣旨にもあうものであろう。

かくて大乘の実践論は一人ひとりが自己の真の幸福をきずくこ
ころの自由人であるような社会を理想とする。「いかなる政府が

最上の政府であるか。われわれ自身を治めることを教える政府がそれである⁽³⁷⁾。それはストアの「宇宙国家」やカントの「目的の王国」と一派あい通ずるものであり、さらには現代の民主主義の根幹でもある。

かくてわれわれ自身を治める、自己目的的生活(探求生活)を送るといふことが人間の信頼関係の基礎である。東西を超えた自己治人の理想である。忍耐や努力、勤労は個人を超える。「勤労は仲間を作る」徳は孤ならず。「真にリベラルであることは他の価値を認めることである」⁽³⁸⁾、心の寛さ、寛容は価値相対という人間哲学の上に立つだろう。またその哲学に立つとき、よい対話と⁽³⁹⁾いふのは単なる反論でもなく単なる迎合でもないようなあるものなのである⁽⁴⁰⁾。

以上のような態度を欠くとわれわれはしばしばいつわりのみせかけの平和とほんとうのそれを見分け得なくなる。みんなが満足しているような社会はない⁽⁴¹⁾、また実際以上に危険な存在はない⁽⁴²⁾(仮想敵の否定)、われわれの人間に対する理解は誤解が大半である⁽⁴³⁾。これらのことばは虚構の平和を見破り、そのことを覚悟し、その克服につねに心掛くべきことをいましていっているように思われる。

本論考において数多く引用せるゲーテの「フョリスム」は Hamburger Ausgabe Band 12: Maximen und Reflexionen (番号 M. u. R.) にあつて、数字はその所載の番号を示す。

- (1) 木村謹治『ゲーテ』一五五ページ
- (2) M. u. R. 1040
- (3) 同書 423, 1038
- (4) 同書 357
- (5) 同書 1040
- (6) 同書 1362
- (7) 同書 319
- (8) 同書 1111
- (9) 同書 1244
- (10) 同書 1070
- (11) 同書 540
- (12) 同書 1024
- (13) 同書 132
- (14) 同書 382
- (15) 同書 138
- (16) 同書 979
- (17) 白隠『坐禪和讃』に平易に表現されている。「六趣輪廻の因縁は己れが愚痴の闇路なり闇路に闇路を踏みそえていつか生死を離るべき」
- (18) M. u. R. 1045
- (19) 同書 310
- (20) 道元『正法眼蔵』「弁道話」
- (21) M. u. R. 1119
- (22) 同書 163
- (23) 同書 463
- (24) 同書 1245
- (25) 同書 718
- (26) 同書 1052

- (27) 回書 1092
- (28) 回書 510
- (29) 回書 714
- (30) 回書 1086
- (31) 回書 62
- (32) 回書 1342
- (33) 回書 1330
- (34) 回書 1178
- (35) 回書 1183
- (36) 回書 54
- (37) 回書 99
- (38) 回書 1083
- (39) 回書 152
- (40) 回書 1190
- (41) 回書 1139
- (42) 回書 1357
- (43) 回書 1193

(おおぬま・ひでほ、哲学、日本大学教授)